

落盤事故

賽の神の祭に出会った、村上市の雷地区を再訪しました。今回は、集落のなかをぶらぶらしました。軒先には熊皮が吊され、玄関前には栗が水漬けして置いてあり、万屋が一軒だけある村。「暮らしの保存館」という印象を受けます。

村のなかに、修理中の茅葺き農家がありました。村の方に聞くと、「住民の方が自力でやっておらる。多分、玄関のほうで作業をやってると思うよ。行ってみたら?」。

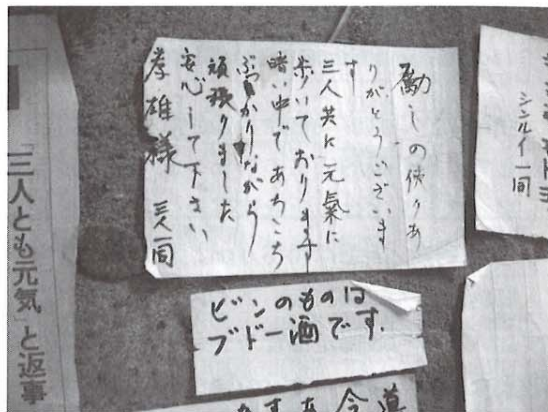


中嶋哲夫の「人事も歩けば」

訪ねたのは大滝洋祐さん(80歳と記憶しています)。玄関前のガレージ兼作業所で、茅の裁断作業(2m近い茅を3分する作業)をやっておられました。奥様と2人です。2人の雰囲気が良いので、声を掛けて話を聞かせていただきました。90分くらい話をまとめると、以下ようになります。

この家は子どもがいなかったので、甥である自分が養子に入った。妻も義父方の親類。4kmほど離れた畑で茅を栽培している。雪の多いところでは、茅葺屋根はよくもって8年。屋根から落ちる雪崩雪が軒先のつららと茅を巻き込むので、傷みが早い。4年くらいしかもたない。順番に葺き替えるが、年中修理をしている。自分でやり出して16年。我流だから上手にならない。冬場は出稼ぎをしていた。

出稼ぎをしているとき、落盤事故で生き埋めにあったことがある。朝日トンネルだ。32



▲落盤事故で生き埋めになったとき交わされた手紙

時間。3人。みんな親類。昭和32(1957)年のことだ。当時の土木工事には半分ヤクザみたいなのが集まっていたが、必死になって助けてくれたのが、その人たち。そのときの証拠があるから見せる。

こう言われて、家からファイルを持ってこられました。落盤事故時、50メートルの竹竿の先に取り付けてやりとりした手紙(写真はその一部)。ファイルには「絶対捨てるな 姉」と書かれていました。

「生き埋めになっているとき、“みんなが事故に気づいていなかったらどうしよう”。こういって仲間が泣くんだよ。俺は追分を歌って励ましたりしたんだが、つくづく思った。人間は1人で生きることにはできない。自分が口下手でなかったら、子どもに命を大切にするようにと伝えてやりたいのだが」。

思いがけない場所で、重みのある言葉に出会いました。(MBO実践支援センター代表)

